

パラアスリートの描かれ方が受け手の 共感・関心・行動に及ぼす影響

遠藤華英

1. 緒言

近年、パラリンピックやパラスポーツに関する報道は、テレビやインターネットを中心に量・質の両面で増加している。こうしたメディア露出の拡大は、パラスポーツそのものへの関心や観戦意欲を高める可能性が指摘されている (Legg & Dottori, 2017)。

先行研究では、パラスポーツ観戦やメディア接触が人々の意識や態度にどのような影響を及ぼすかについて、さまざまな検討が行われてきた。たとえば、イギリスにおける成人を対象としたインタビュー調査では、パラスポーツ観戦を通じて競技を「スポーツ」として捉える傾向が強まり、義肢や車いすなどのテクノロジーを日常的なものとして受け入れる態度が形成されることが報告されている (Pullen et al, 2020)。また、カナダのオンライン調査では、パラリンピック映像の視聴により、パラアスリートの能力評価や心理的温かさ (warmth) が高まる傾向が確認されている (Shirazipour et al., 2023)。一方で、このような効果は必ずしも一貫しておらず、単なる「視聴」だけでは態度変容は限定的であるという指摘もみられる。

このような背景から、態度変容の先行要因として注目されているのが「共感感情 (empathic emotions)」である。Bartsch et al. (2018) は、パラスポーツ映像に音楽を付加して感情的関与を高める実験を行い、音楽付き映像を視聴した群でパラスポーツへの関心が有意に向上したことを報告している。この研究では、共感感情を「一般的共感」「親密感 (closeness)」「省察的思考 (reflective thought)」「哀れみ (pity)」などのサブタイプに区分し、それぞれの影響を分析している。また、障がいのあるモデルを起用した広告を視聴した人々は、障がいのないモデルの広告を視聴した人々に比べ、広告に対するより強い共感感情を示し、広告評価も高かったことが報告されている (Shelton & Waddell, 2021)。

このような共感喚起の観点からは、単なる事実報道よりも、物語形式のニュースや記事のほうが受け手の感情的関与を高め、態度変化を促す可能性が高いことが指摘されて

いる。Oliver et al. (2012) は、登場人物の心理的背景や人生経験に焦点を当てた物語的報道が、受け手の共感的理解を深める効果を持つことを明らかにした。また、Zhuang & Guidry (2022) は、当事者の視点を織り交ぜたストーリーテリングが社会的マイノリティに対するスティグマ軽減につながることを示している。

スポーツ報道においても、選手の競技成績に加えてその人生や挑戦を物語として描く手法は一般的である。先行研究の知見を踏まえると、このようなナラティブ表現は、読み手の共感感情を喚起する有効な手法であると考えられる。しかし、パラスポーツ報道においては、障がいをどのように表象すべきか、あるいはアスリートとしての努力や日常的な活動をどのように描くべきかについて議論が分かれている。特に、障がいを過剰に感動の対象として描く「インスピレーション・ポルノ (inspiration porn)」や、非現実的な努力の象徴として表現する「スーパークリップ (supercrip)」的描写は、障がい者に対して過度な努力や自己責任を求める風潮を助長するおそれがあると指摘されている (Berger, 2008; Shelton, 2017)。

このように、パラアスリートを描く際にどのようなナラティブが肯定的な影響をもたらすのか、あるいは逆にスティグマを強化するのかについては、依然として十分な実証的検証が行われていない。

以上の議論を踏まえ、本研究は、パラアスリートに関する異なるナラティブ表象が受け手に与える影響を明らかにすることを目的とする。具体的には、「障がい」に関連する努力を強調したナラティブ (障がいナラティブ) と、「アスリートとしての努力」を強調したナラティブ (アスリートナラティブ) が、(1) 共感感情 (高揚感, 哀れみ, 親密感, 省察的思考), (2) パラスポーツへの関心 (態度), および (3) パラスポーツに関連する行動にどのような影響を及ぼすのかを検討する。

2. 方法

2.1. 手続きと実験デザイン

本研究は、パラアスリートに関する異なるナラティブ描写が (1) 共感感情, (2) パラスポーツへの関心, (3) パラスポーツに関連する行動に及ぼす影響を検証することを目的として実施したオンラインによるランダム化実験である。調査対象は日本在住の成人600名とし、性別および年代が均等になるよう割り付けを行った。参加者は、以下の3条件のいずれかに無作為に割り当てられた (各群200名)。提示されたナラティブはいずれも、実在する日本人パラリンピック金メダリストである小田凱人氏に関する記

事であり、次の3種類で構成した。

- (1) 障がいナラティブ：障がいを受傷してから車いすテニスに出会い、挑戦を重ねる過程を描いた内容（記事1）。
- (2) アスリートナラティブ：金メダル獲得に至るまでのトレーニングや競技への取り組みを中心に描いた内容（記事2）。
- (3) 統制ナラティブ：当該選手がパリ・パラリンピックで金メダルを獲得した事実のみを簡潔に伝える内容（記事3）。

記事読了後、参加者は共感感情の下位尺度（一般的共感、親密感、哀れみ、省察的思考）に関する質問項目に回答した。

2.2. 測定項目

2.2.1. 共感感情

理論的背景に基づき、共感感情を以下の4種類の自己報告尺度で測定した。すべての項目は、「1 = 全くそう思わない」から「7 = とてもそう思う」までの7件法（1 = 全くそう思わない、2 = そう思わない、3 = あまりそう思わない、4 = どちらともいえない、5 = 少しそう思う、6 = そう思う、7 = とてもそう思う）で評価した。

一般的共感指標については、ユーダイモニックなエンターテイメントに対する共感感情を検討した Batson et al. (1987) および Oliver (2008) を参照し、「感動した」「優しい気持ちになった」「心に響いた」の3項目を使用した。

親密感については、Oliver et al. (2013) によって開発された尺度を参照し、「親密さを感じた」などの4項目を用いた。

哀れみについても、Oliver et al. (2013) の尺度に基づき、「気の毒に思った」「心配になった」などの4項目を使用した。

省察的思考については、Bartsch (2012) を参照し、物語内容について考える程度を測定する4項目を用い、「この記事は価値のある事について考えるきっかけとなった」などの項目を7件法で評価した。

2.2.2. パラスポーツへの関心

態度的側面とする共感感情パラスポーツへの関心は、提示された記事の対象となった選手、パラリンピック、その他のパラスポーツおよびパラアスリートへの関心度を測定する先行研究の尺度をもとに7項目（例：「パラスポーツに関連するニュースを観たい」「パラアスリートのことを知りたい。」）を使用し、7件法で評価した。

2.2.3. 行動指標

行動的側面の測定として、記事内で紹介されたアスリートの試合などの追加情報へのアクセス行動を指標とした。調査システムは、参加者が「追加情報を閲覧する（次のページに進む）」リンクをクリックしたか否かを自動的に記録し、情報探索行動の有無を行動指標として用いた。

2.2.4. 共変量

加えて、共変量として、障がい者との接触経験（頻度および親密度）、スポーツへの日常的な愛好度合いを示すスポーツファンダム、社会的望ましきバイアス（Social Desirability Bias）を測定した。社会的望ましきについては、下位尺度である自己欺瞞（Self Deception）と印象操作（Impression Management）を用いた（Paulhus, 1983）。

各尺度のCronbachの α 係数は、一般的共感（ $\alpha = .94$ ）、親密感（ $\alpha = .92$ ）、哀れみ（ $\alpha = .91$ ）、省察的思考（ $\alpha = .95$ ）、およびパラスポーツへの関心（ $\alpha = .99$ ）であった。

すべての尺度が.90前後またはそれ以上の高い内的一貫性を示しており、測定項目の信頼性は十分であると判断できる。

なお、各項目の平均値および標準偏差の詳細は表1に示した。

2.3. 分析方法

本研究では、まず提示刺激が意図した操作として機能しているかを確認するために操作性チェックを実施した。具体的には、「障害に関連した努力の強調」および「アスリートとしての努力の強調」の二項目を7件法で評価させ、その得点について、一元配置分散分析（one-way ANOVA）により記事間の差を検討した。

一元配置分散分析は以下の線形モデルで表すことができる。

$$Y_{ij} = \mu + \alpha_i + \varepsilon_{ij}$$

ここで、 Y_{ij} は参加者 j の従属変数（操作性チェック得点または後述の心理指標の得点）、 μ は全体平均、 α_i は記事条件（3水準）の主効果を表し、 ε_{ij} は誤差項である。

操作性チェックに続いて、記事が心理指標ならびに関心・行動に及ぼす影響を検証するため、共感感情の各下位尺度（一般的共感、親密感、哀れみ、省察的思考）およびパラスポーツ関心を従属変数とし、同様のモデルに基づく一元配置分散分析を個別に実施した。

表1 記述統計と尺度の信頼性

	シナリオ1		シナリオ2		シナリオ3		<i>a</i>
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
一般的共感							
感動した	4.74	1.32	4.42	1.46	4.39	1.38	0.94
優しい気持ちになった。	4.53	1.27	4.33	1.41	4.33	1.33	
心に響いた。	4.68	1.35	4.40	1.43	4.38	1.38	
親密感							
思いやりを感じた。	4.32	1.29	3.99	1.32	4.13	1.32	0.92
親密さを感じた。	4.03	1.33	3.84	1.38	3.90	1.32	
つながりを感じた。	4.02	1.37	3.70	1.42	3.82	1.30	
哀れみ							
憐れみを感じた。	3.22	1.47	2.82	1.49	2.88	1.43	0.91
気の毒に思った。	3.33	1.50	2.76	1.49	2.73	1.39	
心配な気持ちになった。	3.24	1.43	2.82	1.48	2.84	1.41	
同情的な気持ちになった。	3.92	1.37	3.41	1.44	3.48	1.42	
省察的思考							
この記事は、自分にとって大切なことに集中することを促してくれた。	4.24	1.31	4.18	1.36	3.97	1.37	0.95
この記事は、価値のある事について考えるきっかけとなった。	4.33	1.25	4.20	1.40	4.09	1.36	
この記事は、私に新たな気づきを与えてくれた。	4.24	1.30	4.07	1.42	3.95	1.36	
この記事を読んで、自分自身について考えることになった。	4.21	1.28	3.96	1.44	3.82	1.38	
パラスポーツへの関心							
小田選手の試合を観たい。	3.77	1.58	3.75	1.60	3.69	1.60	0.98
小田選手のことをもっと知りたい。	3.62	1.47	3.62	1.54	3.56	1.53	
小田選手のSNSをフォローしたい。	3.21	1.50	3.26	1.60	3.22	1.48	
次回のパラリンピックを観たい。	3.70	1.61	3.80	1.65	3.73	1.71	
パラスポーツに関連するニュースを観たい。	3.52	1.50	3.65	1.56	3.57	1.55	
パラアスリートのことを知りたい。	3.52	1.48	3.65	1.56	3.53	1.54	
パラスポーツの情報を探したい。	3.42	1.40	3.51	1.52	3.44	1.52	

さらに、パラスポーツへの関心と共感感情との関連を検討するために、パラスポーツ関心を従属変数とした重回帰分析を実施した。ここでは、共感感情の下位尺度を主たる説明変数とするとともに、一部の背景要因を共変量として統制した。重回帰分析は以下の一般式で表される。

$$\text{parainterest}_j = \beta_0 + \sum_{k=1}^4 \beta_k X_{kj} + \sum_{m=1}^M \gamma_m Z_{mj} + \varepsilon_j$$

ここで、 parainterest_j は参加者 j のパラスポーツ関心、 X_{kj} は共感感情の下位尺度 ($k=1$: 一般的共感, $k=2$: 親密感, $k=3$: 哀れみ, $k=4$: 省察的思考) を示し、 Z_{mj} は後述する共変量 (背景要因)、 ε_j は誤差項を表す。なお、共変量の具体的内容については後述の節で説明する。

最後に、情報探索行動 (「次のページに進む」を 1, 「回答をやめる」を 0 とする二値) を従属変数とし、行動に影響する要因を探索する目的で二項ロジスティック回帰分析を実施した。ロジスティック回帰モデルは以下の式で表される。

$$\begin{aligned} \log \left(\frac{P(Y_j=1)}{1-P(Y_j=1)} \right) \\ = \beta_0 + \beta_1 D_{\text{Scenario1},j} + \beta_2 D_{\text{Scenario2},j} + \sum_{k=1}^4 \beta_{2+k} X_{kj} + \sum_{m=1}^M \gamma_m Z_{mj} \end{aligned}$$

ここで、二項ロジスティック回帰モデルにおいては、 Y_j を参加者 j の情報探索行動 (1 = 次のページに進む, 0 = 回答をやめる) とし、記事条件を表す二つのダミー変数 $D_{\text{Scenario1},j}$ および $D_{\text{Scenario2},j}$ は統制群 (0) を基準とした。さらに、共感感情の下位尺度 (一般的共感, 親密感, 哀れみ, 省察的思考) を説明変数として投入し、加えて共変量として後述する背景要因も投入した。

3. 結果

3.1. 操作性チェック

本実験で用いた 3 種類の記事が、想定したナラティブ操作として適切に機能していたかを確認するため、操作性チェックを行った。具体的には、参加者に対し、「この記事は小田凱人選手の障がいを克服する努力を強調していた (障がい強調)」と「この記事は小田凱人選手のアスリートとしての努力を強調していた (アスリート強調)」の 2 項目について 7 件法で評価を求めた。操作性の確認を行った結果、障がいの強調認知 ($F(2,597) = 29.84, p < .001$) およびアスリートの強調認知 ($F(2,597) = 3.81, p < .01$)

において有意な群間差が認められた。また、多重比較の結果、障がい強調認知は記事1が記事2および3より有意に高く、アスリート強調認知は記事2が記事3より有意に高かった。これらの結果から、各記事が意図した方向に操作されていたことが確認された。

一方で、スポーツファンダム ($F(2,597) = 3.36, p < .05$) では記事3が記事1より高い傾向がみられたが、その他の変数(障がいのある人との交流経験, 自己欺瞞, 印象操作)では有意差はみられなかった。

以上より、操作は概ね想定どおりに機能しており、後続の分析に進むことが妥当であると判断した。また、有意差が生じたスポーツファンダムを共変量として以降の分析に追加した(表2参照)。

表2 操作性チェックの結果

	シナリオ1		シナリオ2		シナリオ3		F 値	多重比較
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
障害強調	5.03	1.29	4.21	1.48	3.98	1.51***	29.841	1>2,3
アスリート強調	5.12	1.30	5.20	1.43	4.84	1.42**	3.814	2>3
スポーツファンダム	14.70	14.57	15.25	15.76	18.48	16.89*	3.364	3>1
障害のある人との交流経験	6.76	15.73	7.15	15.85	8.76	21.49	0.702	
自己欺瞞	45.99	10.20	46.77	9.06	45.94	9.72	0.457	
印象操作	50.69	8.52	50.08	8.70	49.44	8.28	1.081	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

3.2. 記事別の差の検討

3.2.1. 共感感情

一要因分散分析の結果、共感感情の下位尺度のうち、哀れみにおいてのみ有意な群間差が認められた。

一般的共感は、記事1(障がいナラティブ)が最も高く($M = 4.52$)、次いで記事2($M = 4.37$)、記事3($M = 4.32$)であったが、群間差は有意ではなかった($F(2,597) = 1.42, p = .243, \eta^2 = .005$)。親密感についても、記事1($M = 4.04$)が最も高く、記事2($M = 3.91$)、記事3($M = 3.96$)がこれに続いたが、有意な差は認められなかった($F(2,597) = 0.64, p = .530, \eta^2 = .002$)。

一方、哀れみでは有意な群間差が示され($F(2,597) = 6.83, p = .001, \eta^2 = .022$)、事後比較の結果、記事1が記事2および記事3より有意に高かった(それぞれ $p = .025, p = .001$)。省察的思考(reflective thought)は、記事1($M = 4.17$)、記事2($M = 4.11$)、

記事3 (M=3.93) の順であったが、有意な差は認められなかった (F(2,597)=1.87, p=.155, $\eta^2=.006$)。

3.2.2. パラスポーツへの関心

パラスポーツへの関心は、記事2 (アスリートナラティブ) が最も高かったが (M=3.60), 群間差は有意でなかった (F(2,597)=0.15, p=.861, $\eta^2=.001$)。すなわち、ナラティブの違いは関心の程度に有意な影響を与えなかった (表3)。

3.2.3. 情報探索行動

全体の55.7%が「次のページに進む」と回答し、44.3%が回答を終了した。割合は記事1で50.5%, 記事2で57.0%, 記事3で59.5%であった。カイ二乗検定の結果、ナラティブ条件と行動選択の関連は有意でなかった ($\chi^2(2)=3.50$, p=.174) (表4)。

したがって、ナラティブの違いは情報探索行動に統計的に有意な影響を及ぼさなかったが、アスリートおよび統制ナラティブにおいて行動意欲がわずかに高い傾向がみられた。

表3 シナリオ別の差の検討結果

	シナリオ1	シナリオ2	シナリオ3	F値	多重比較	効果サイズ
一般的共感	4.52	4.37	4.32	1.419		0.005
親密感	4.04	3.91	3.96	0.636		0.002
哀れみ	3.43	3.11	2.99	6.826**	1>2,3	0.022
省察的思考	4.17	4.11	3.93	1.873		0.006
パラスポーツへの関心	3.53	3.60	3.53	0.15		0.001

***p<.001, **p<.01,*p<.05, †p<.10

表4 シナリオによる情報探索行動の差

	シナリオ1	シナリオ2	シナリオ3	計	統計
次のページに進む	101 (50.5)	114 (57)	119 (59.5)	334 (55.7)	$\chi^2(2)=3.5$, p=.174
回答をやめる	99 (49.5)	86 (43)	81 (40.5)	266 (44.3)	

() 内は%を示す

3.3. 共感感情とパラスポーツへの関心の関連性

続いて、パラスポーツへの関心を従属変数とした重回帰分析を行った (表5)。独立変数として、一般的共感、親密感、哀れみ、省察的思考、性別、年齢、およびスポーツファンダムを投入した。標準化係数をみると、省察的思考 ($\beta=.37$, p<.001), 親密

感 ($\beta = .25, p = .006$), およびスポーツファンダム ($\beta = .17, p = .002$) が有意な正の影響を示した。

一方で, 一般的共感 ($\beta = .11, p = .168$), 哀れみ ($\beta = .03, p = .64$), 性別 ($\beta = -.02, p = .68$), および年齢 ($\beta = -.07, p = .19$) は有意な影響を示さなかった。

これらの結果から, 認知的・内省的な反応(省察的思考)や登場人物との心理的親近感, ならびに一般的なスポーツ関心が高いほど, パラスポーツへの関心が高まることが示唆された。

表5 パラスポーツへの関心に関連する要因の検討

	B	標準誤差	β	t 値
(定数)	-0.07	0.42		-0.17
性別ダミー	-0.06	0.15	-0.02	-0.41
年齢	-0.01	0.01	-0.07	-1.32
スポーツファンダム	0.02	0.01	0.17	3.10**
一般的共感	0.13	0.09	0.11	1.38
親密感	0.29	0.11	0.25	2.76**
哀れみ	0.03	0.07	0.03	0.47
省察的思考	0.45	0.09	0.37	5.14***
R ²	0.54			

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

3.4. 情報探索行動に影響を与える要因の特定

最後に, 情報探索行動(「次のページに進む = 1」, 「回答をやめる = 0」)を従属変数とし, 個人属性(性別, 年齢, スポーツファンダム)および感情指標・関心指標を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った(表6)。

分析の結果, 女性であること ($B = 0.46, p = .014, OR = 1.58$), スポーツファンダム ($B = 0.03, p < .001, OR = 1.03$), およびパラスポーツへの関心 ($B = 0.39, p < .001, OR = 1.48$) が有意な正の影響を示した。すなわち, 女性ほど, またスポーツへの関与やパラスポーツへの関心が高いほど, 追加情報へのアクセス行動を取る傾向が高かった。

一方で, 哀れみは有意な負の影響を示し ($B = -0.22, p = .021, OR = 0.81$), 哀れみ感情が強いほど情報探索行動を取る確率が低下することが示された。

その他の変数(年齢, 一般的共感, 親密感, 省察的思考, ナラティブ条件D1・D2)は有意な効果を示さなかった(すべて $p > .05$)。

表6 情報探索行動に関連する要因の検討

説明変数	B	オッズ比
性別ダミー	0.46*	1.58
年齢	-0.01	0.99
スポーツファンダム	0.03***	1.03
一般的共感	0.24 †	1.27
親密感	-0.11	0.89
哀れみ	-0.22*	0.81
省察的思考	-0.08	0.92
パラスポーツへの関心	0.39***	1.48
シナリオ1ダミー	-0.24	0.79
シナリオ2ダミー	-0.03	0.97
(定数)	-1.01	0.36
Chi-square	84.676	
df	10	
cox-snell R ² 乗	0.132	
Nagelkerke	0.176	

***p < .001, **p < .01, *p < .05, †p < .10

4. 考察

本研究は、3種類のナラティブ（障がいナラティブ、アスリートナラティブ、統制ナラティブ）を用いて、共感感情、パラスポーツへの関心、および情報探索行動に与える影響を検証した。また、パラスポーツへの関心および情報探索行動に影響を与える要因の特定も試みた。

その結果、障がいに焦点を当てた記事（障がいナラティブ）は、共感感情の下位尺度のうち哀れみとの有意な関連を示した。一方で、パラスポーツへの関心においては、親密感および省察的思考が有意な正の関連を示した。記事自体は関心や行動に直接的な影響を与えなかったが、哀れみは行動に対して負の関連を示し、関心は正の関連を示した。これらの結果は、障がいを強調したナラティブが特定の感情を喚起する一方で、それが必ずしも行動意図の向上にはつながらないことを示唆している。

先行研究によれば、「哀れみ」は両義的な感情であり、思いやりや援助意図といった向社会的側面を有する一方で、他者との下方比較を通じて優越感や心理的距離の増大をもたらすことが指摘されている（Fiske et al., 2002; Fitzgerald, 2012; Florian et al., 2000）。Fiske et al. (2002) は、哀れみが高齢者や知的・身体障がい者に対するパターンリスティック（温情的だが能力を低くみなす）ステレオタイプと結びついていること

を指摘している。本研究の結果も、こうした感情がパラスポーツへの関心や具体的な行動意図の促進にはつながらない可能性を支持している。すなわち、哀れみの喚起は一見共感的であるように見えても、実際にはメディアの受け手とメディアで表象される対象との心理的距離を拡大させる効果をもたらす場合があると考えられる。

一方、情報探索行動に最も強い影響を与えたのはパラスポーツへの関心であった。重回帰分析の結果、この関心に関連する要因として親密感と省察的思考が挙げられた。今回の記事実験では、哀れみ以外の共感感情に記事間の顕著な差はみられなかったが、関心を高める上では、アスリートや競技への理解を深める「親密感」や、自身の価値観や社会的意義を考える「省察的思考」を喚起するアプローチが有効であると考えられる。先行研究でも、共感や親近感を喚起する報道がパラリンピックへの関心を高めることが示されており (Bartsch et al., 2018)、本研究の知見はこれを支持するものである。したがって、パラスポーツ普及においては、障がいに関連した努力を前面に出すよりも、アスリートとしての挑戦や競技上の努力に焦点を当てたナラティブの方が、関心喚起や行動促進に有効である可能性が高い。

総じて、本研究の結果は、障がいに特化したナラティブが共感感情のうち「哀れみ」を喚起しやすい一方で、その感情がパラスポーツへの関心や情報探索行動には結びつきにくいことを示した。他方で、親密感や省察的思考は関心の形成に寄与し、さらにその関心が行動を媒介する重要な要因であることが明らかとなった。これらの知見は、パラスポーツ報道におけるナラティブ設計において、単に障がいの困難を際立たせる構成ではなく、アスリートの日常的な努力や競技への姿勢を丁寧に描写することで、受け手が「自分にも関係のある物語」として捉えやすくするような構成が効果的である可能性を示している。こうした描写は、アスリートを特別視するのではなく、読者が自身の経験や価値観と照らし合わせながら理解できる“つながりの感覚”を促し、その結果としてパラスポーツへの関心の喚起につながると考えられる。

本研究にはいくつかの限界がある。第一に、行動指標として用いた「情報リンクのクリック」は、行動としての強度が低く、実際の行動変容を十分に反映していない可能性がある。今後は、寄付意図、観戦意図、SNS 共有行動など、多様な共感行動を測定する必要がある。第二に、本研究は身体障がい、特に車いすを使用したアスリートに焦点を当てており、他の障がいのあるアスリートや競技への一般化には限界がある。第三に、共感感情・関心・行動の間の因果的関係を統計的に明示したのではなく、構造的分析 (例：共分散構造分析) を通じた理論モデルの検証が今後の課題である。

引用参考文献

- Bartsch, A. (2012). Emotional gratification in entertainment experience: Why viewers of movies and television series find it rewarding to experience emotions. *Media Psychology, 15*, 267–302. <https://doi.org/10.1080/15213269.2012.693811>
- Bartsch, A., Oliver, M. B., Nitsch, C., & Scherr, S. (2018). Inspired by the Paralympics: Effects of empathy on audience interest in para-sports and on the destigmatization of persons with disabilities. *Communication Research, 45*(4), 525–553. <https://doi.org/10.1177/0093650215626984>
- Batson, C. D., Fultz, J., & Schoenrade, P. A. (1987). Distress and empathy: Two qualitatively distinct vicarious emotions with different motivational consequences. *Journal of Personality, 55*, 19–40. <https://doi.org/10.1111/j.1467-6494.1987.tb00426.x>
- Berger, R. J. (2008). Disability and the dedicated wheelchair athlete: Beyond the “supercrip” critique. *Journal of Contemporary Ethnography, 37*, 647–678. <https://doi.org/10.1177/0891241607309892>
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 878–902.
- Florian, V., Mikulincer, M., & Hirschberger, G. (1999). The anatomy of a problematic emotion — the conceptualization and measurement of the experience of pity. *Imagination, Cognition and Personality, 19*(1), 3–25. <https://doi.org/10.2190/4JG9-M79P-HJYK-AQNE>
- Legg, D., & Dottori, M. (2017). Marketing and sponsorship at the Paralympic Games. In *Managing the Paralympics* (pp. 263–288). London: Palgrave Macmillan UK.
- Oliver, M. B. (2008). Tender affective states as predictors of entertainment preference. *Journal of Communication, 58*, 40–61. <https://doi.org/10.1111/j.1460-2466.2007.00373.x>
- Oliver, M. B., Dillard, J. P., Bae, K., & Tamul, D. J. (2012). The effect of narrative news format on empathy for stigmatized groups. *Journalism & Mass Communication Quarterly, 89*(2), 205–224. <https://doi.org/10.1177/1077699012439020>
- Oliver, M. B., Hoewe, J., Kim, K., Cooke, T., Shade, D., Bartsch, A., & Kalch, A. (2013, November). Affective responses to media messages as a means of reducing stigmatization. Paper presented at the annual conference of the National Communication Association, Washington, DC.
- Paulhus, D. (1983). Sphere-specific measures of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology, 44*(6), 1253. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.44.6.1253>
- Pullen, E., Jackson, D., & Silk, M. (2020). Watching disability: UK audience perceptions of the Paralympics, equality and social change. *European Journal of Communication, 35*(5), 469–483. <https://doi.org/10.1177/0267323120909290>
- Shelton, S. (2017, March). Not an inspiration just for existing: How advertising uses physical disabilities as inspiration: A categorization and model. In *AEJMC Southeast Colloquium*, Texas Christian University, Fort Worth, Texas.
- Shelton, S. S., & Waddell, T. F. (2021). Does ‘inspiration porn’ inspire? How disability and challenge impact attitudinal evaluations of advertising. *Journal of Current Issues & Research in Advertising, 42*(3), 258–276. <https://doi.org/10.1080/10641734.2020.1808125>
- Shirazipour, C. H., Stone, R. C., Lithopoulos, A., Capaldi, J. M., & Latimer-Cheung, A. E. (2023). Examining the impact of the Rio 2016 Paralympic Games on explicit perceptions of Paralympians and individuals with disabilities. *Health Communication, 38*(8), 1501–1507.

<https://doi.org/10.1080/10410236.2021.2017107>

Zhuang, J., & Guidry, A. (2022). Does storytelling reduce stigma? A meta-analytic view of narrative persuasion on stigma reduction. *Basic and Applied Social Psychology, 44* (1), 25–37. <https://doi.org/10.1080/01973533.2022.2039657>

Appendix

記事1

タイトル：「夢を諦めない力：障がい乗り越えた小田凱人，栄光の金メダル」

内容：

愛知県一宮市出身の小田凱人（18）は、2024年のパリパラリンピックで車いすテニスのシングルス金メダルを獲得した。その輝かしい結果は、幼少期に大きな障がいを負いながらも、新たな夢へ挑戦し続けた“乗り越える力”が結実したものにはほかならない。

彼の運命を大きく変えたのは、わずか9歳で左脚に骨肉腫が見つかったときである。命を守るため、股関節から大腿骨の一部を切除し、人工関節を入れる手術を受けるしかなかった。活発にサッカーを楽しんでいた少年にとって、車いすを日常の支えとせざるを得ない現実には、夢や希望だけでなく、自分らしさまでも失ってしまうかもしれないという恐怖をもたらした。

絶望の淵で彼を支えたのは、医師や家族、そして多くの周囲の励ましであった。リハビリでは、車いすでの生活や身体の痛みと向き合うだけでなく、自分の心と向き合う作業も続いた。最初は簡単な動きすらできず、「もう何もできない」という思いに押しつぶされそうになった。しかし、入院中に目にしたパラリンピックの車いすテニス競技から「もう一度スポーツに挑戦してみよう」という小さな火が灯り、退院後の彼はその思いを頼りに、一歩ずつ前に進み始める。

車いすテニスを始めることで得た新たな目標は、小田選手にとって「できない自分」に向き合う手がかりとなった。はじめは車いすを操作してラケットを振るだけでも困難だったが、練習を重ねる中で「少しずつできることが増えていく」という感覚が、再び未来に光を見出すきっかけとなる。こうした日々の積み重ねがやがて実を結び、2024年のパリパラリンピックで金メダルを獲得した瞬間は、彼にとって「かつての夢を失ったときの自分」との決別でもあった。小田選手はインタビューで「昔の自分にも、今の自分の姿を見せてあげたい」と述べており、その言葉には努力や苦悩の果てに見出した確かな自信が感じられる。

小田選手の物語は、どんな大きな障がいに直面しても、支え合いと自分自身を信じる気持ちがあれば、新たな道を切り開けるということを強く教えてくれる。彼の金メダルは、「新しい夢」を見つけるために奮闘し続けた証といえよう。

記事2

タイトル：「若きエース小田凱人，練習の積み重ねが生んだ金メダル」

内容：

2024年のパリパラリンピックにおいて車いすテニス男子シングルの頂点に立った小田凱人（18）は、競技者としての鍛錬と闘志を兼ね備えた若きエースである。愛知県一宮市出身の小田は、幼少期からスポーツに打ち込み、その後車いすテニスに転向して才能を開花させた。

彼の強さを支えているのは、毎日の練習におけるストイックな姿勢である。小田選手のトレーニングは、基礎的な体力づくりから高度な戦術面の研究まで多岐にわたる。練習ではコートでの反復練習だけでなく、試合映像の分析やメンタルトレーニングにも積極的に取り組み、己のプレースタイルを徹底的に高めてきた。

世界のトップ選手と鏖を削るためには、フィジカル面とメンタル面の両立が欠かせない。小田選手

は、試合前のコンディション管理から試合中の集中力維持に至るまで、綿密なプランを立てて実行しているという。2021年には車いすテニスのジュニア世界ランキングで1位を獲得し、さらに翌年には年間王者となってプロとしての地位を確立した。その後も国際大会で躍進を続け、今回のパリパラリンピックでは金メダルを射止めた。

決勝戦では、粘り強いラリーと多彩なショットで相手を追い込み、逆境にあっても焦らず冷静に戦術を遂行した。最後のポイントを奪った瞬間、コートには小田選手の全力を出し切った充足感と勝利の歓喜が広がった。試合後のインタビューで彼は「ここまで積み上げてきた努力が、最高の形で報われた」と語り、今後もさらなる高みを目指す意欲を示している。

小田凱人は、日々のトレーニングに裏打ちされた技術と闘志を武器に、世界の舞台を駆け上がっている。スポーツへの真摯な姿勢が生み出す結果は、多くのファンを魅了し、今後の成長にも大きな期待を抱かせる。彼の挑戦はまだ始まったばかりであり、これからも新たな偉業を成し遂げていくことだろう。

記事3

タイトル：「パリ2024パラリンピックについて」

内容：

2024年にフランス・パリで開催されたパラリンピックは、世界中の障がいを持つアスリートたちが集い、スポーツを通じて力と情熱を発揮する祭典として注目を集めた。パリ2024パラリンピックは「多様性と包括性」をテーマに掲げ、世界中から多くの選手が参加し、観客や視聴者に大きな感動を届けた。日本選手団からは、車いすテニス男子シングルスに出場した小田凱人（18）が金メダルを獲得した。

The Effects of Narrative Framing of Para-Athletes on Audience Empathy, Interest, and Behavioral Responses

ENDO Hanae

This study examines how different narrative frames in media coverage of para-athletes influence readers' empathic responses, interest in parasports, and subsequent information-seeking behavior (i.e., whether they sought additional information about the athlete featured in the article) .

An online experiment was conducted with 600 adults residing in Japan, who were randomly assigned to one of three conditions: (a) a *disability narrative* emphasizing the athlete's efforts to overcome impairment, (b) an *athletic narrative* emphasizing effort and performance as an athlete, or (c) a *control narrative* presenting factual information in a neutral tone.

Empathy was measured using a multidimensional scale consisting of *general empathy*, *closeness*, pity, and reflective thoughts, while interest in parasports was assessed using an interest scale drawing on existing research. As a behavioral indicator, participants' clicks on an in-article link labeled "See more information" were recorded.

Among the empathy components, only pity showed a significant difference across conditions, with the disability narrative eliciting higher levels of pity than the other two. No significant differences were observed for other empathy dimensions or for interest in parasports.

Regression analyses revealed that interest in parasports was positively associated with reflective thoughts and closeness. Information-seeking behavior was also promoted by higher interest, whereas pity had a significant negative effect—participants who felt stronger pity were less likely to engage in further information-seeking.

These findings suggest that narratives emphasizing disability tend to evoke pity,

but such emotions do not necessarily enhance interest or behavioral intentions toward parasports; rather, they may inhibit active engagement.